



大泉小だより

令和6年10月31日
練馬区立大泉小学校

「読書の秋～子供の思考力を高める読書～」

校長 小高敏男

11月に入り秋も深まってきました。秋と言えば読書の秋です。大泉小学校では、年間を通じて朝読書の時間が設定され、本に親しんでいる子供たちが多くいます。また、読書は主体的な取り組みであり、子供たちが主体的に学び、思考力・判断力・表現力を高める授業を目指して日々授業改善を進めている本校では、大事な取組の一つです。今回は、読書の思考力について考えてみましょう。

読書は、考える力を伸ばすと言われますが「それはなぜなのか?」。そこには「三つの間」と「補う」という活動が重要ではないかと考えます。「三つの間」とは、「時間・行間・仲間」です。

本を読む「時間」は、自分のペースで読めるところに有効性があります。ビデオや映画は、一方的に与えられる時間の範囲内で思考します。巻き戻しなどもできますが、ストレスがあるものです。しかし、本は、ゆっくり読んだり繰り返し読んだり戻って確かめたりと、時間の使い方は自分なりでよいのです。本を読んでいたはずなのに、ふと考えごとをしていて内容から離れているなどということもあります。

次に、「行間」です。本を読んでいると、様々な想像が膨らみます。登場人物の気持ちや情景を想像したり、展開を予想したりします。読書では、文字の先にある世界に入り込み、「文字と文字」「行と行」の間にある書かれていないことを想像するのが楽しいのです。また、その読書活動そのものの自体が思考力だとも思います。

最後は、「仲間」です。本を読むのは一人ですが、本を読んだことで、他の誰かと本の話をするのがとても重要だと考えます。読み手である子供は、本の話をするときに、本を読んで思考していることを話すわけです。本を読んでいるときの思考は、あまり明確なものではありません。自分の思考を「話す」という行為は、思考を形にすることでもあります。そして、それを聴き手と共に、「それは、こういうこと?」「自分はこう思う。」などと会話をすると、更に子供の思考が補われます。

思考には限りがありません。また、自分自身でも何を思考しているのか不明瞭であることが多いものです。だから、話したり書いたりする表現活動を通して自己の思考に向き合い、明確なものにしていきます。一度や二度の書いたり話したりしたときの思考は、完璧なものではありません。他者との会話と意見交換を重ねて思考が深まったり広がったりするのです。そこには、「思考を補う」という活動が重要であると考えます。

子供への読み聞かせがよいと言われる訳には、この、会話で思考を補っていく思考活動が子供の思考力を伸ばす活動としてとてもよいことがあるのではないのでしょうか。小学生の頃に、一番身近にいて「思考を補う」活動をしてくれる他者は、親や家族です。読書の秋のこの時期に、子供と共に本を読み、本に書かれていることについて楽しい語らいの時間をもってみてください。どんな会話をすればいいのか悩んでしまう方がいたら、子供の話の後に「〇〇と言いたいところもあるのかな?」などと子供の話を「補う」会話をしてみてください。その言葉に、子供は自分の考えを更に膨らませます。

秋の夜長が楽しい時となることを願っています。読書の秋、親子の思考を補う語らいを楽しまれてはいかがでしょうか。学校でも、先生と子供たちの語らいを大事にしていきたいと思います。